

活動報告

講座「埼玉の民俗文化－不思議・面白・楽しみ 発見」

講師 さいたま民俗文化研究所 所長 大館勝治先生

2019－7・20 記 小川雅愛、写真 大館徹

- ★実施日時 2019－7・18（木）10：00～12：00
- ★会場 新所沢公民館 学習室5，6号
- ★参加者 71名（会員29名、ところざわ倶楽部自然と農業会員など42名）
- ★資料・機器 研究所作成資料、パワーポイントプロジェクター使用

■実施内容

1. 開催にあたって

当活動は初め7月定例第3週活動として企画し、大館勝治先生に特にご無理を言って実現したものである。先生との交渉を進める過程で、民俗文化の持つ性格が、古代国家にみられる年中行事が歴史に与えたインパクトと同様、民衆の民俗文化が地域の歴史の流れをつくることも感じていた。当会の10周年にあたり、過去の活動を調べていくと総会などを除く150回以上の活動の3分の1は地域の民俗文化とかかわりの深いものであった。毎年1月期の活動「地域食文化を体験する料理教室での「繭玉づくり」、「麦作を背景とした武蔵野うどんづくり」、法華寺で「焙烙灸」体験、富士講を体感する「富士塚巡り」等々が過去実施の数例である。あまり意識しないまま民俗文化に通じる活動を行ってきた。

こうした事情から今回の講座を「7月定例会兼10周年記念講座」と銘打つことにし、会の枠を越えた開催を考慮して準備した。ところざわ倶楽部の各サークル、漆の実、さんさん会等への参加要請や会員の友人・知己の方々にPRをしていただいた結果、かなり以前に先生のお話を聞いたが、また聴講したい方々など多くの方に参加いただき80名定員の会場はほぼ満員の盛況となった。

講師の大館勝治先生は文化財保護・民俗文化の輝かしいご経歴、現職も所長というお役職から近寄りがたい方と思っていたところ、全くフランクなお人柄で、話は明快で、ユーモアたっぷりの講義、タイトル副題のとおり興味津々でたのしく講座を聞くことができた。

2. 講義の紹介

1) イントロ



民俗文化とは何かというような難しい解釈の話からでなく、「昆虫は面白い・植物も面白い」麦秋の季節にあたる今「蝉の季節・・・それぞれ蝉は地元名をもっていた」「カブトムシ・カメムシの所沢での地元名は?」「毛虫に刺されて一番痛いのは?」「植物の面白名一牧野富太郎（植物学者）命名　へくそかずら等口にするのも恥ずかしい植物の命名」などの話からである。時折、子供時代の体験をふまえた話や誰でも経験がある話から入られ、興味津々で聞き入った。学生に説明するのは時間がかかるが、本日の参加者は話が早く通じやすいとユーモアを交えて話された。タイトルの不思議・面白・楽しみ発見である。

地元所沢の不思議・面白話題として、「ジャコウアゲハ」（昔は所沢に多くいた。馬のつる草を好む、毒を持つ草を食べ鳥から身を守っている）と対比して話された「アオスジアゲハ」は楠を好む、楠は樟腦の材料になる木、卵を楠に生む、蜂などから幼虫を守っている。今の時期には小手指南口ロータリーの楠の近くを飛んでいるので、是非見てくださいと勧められた。

蝉・カブトムシ・カメムシ等も所沢と県内を少し離れた地域だけでも呼び名は様々で面白く調べられる。地元につながる名前、言葉を調べるのは民俗の方言を調べる活動と相通じるものがある。こうした言葉を所沢のものとして残しておきたいと話された。

2) 民俗文化の話

①今の時期（麦秋）、麦刈り・麦の脱穀を終えて夏祭りの天王様を迎える。

天王（牛頭天王）は元タインドの神様（牛頭はサンスクリット語）が中国に伝わり、日本に伝来した習俗である。天王様は厄神様で丁重に祀ることによって、夏に流行る疫病を防ぐと信じられてきた。つい最近では北野天神の八雲神社で地口灯籠を飾る天王様の祭があった。昔は神輿を担いで町内を練り歩き、この日はハレの日（＝遊び日）であった。埼玉ではダンバー祭りと言っていた。秩父地方は所沢と違い方言が残っており、理解できないことが多かった。今は使う人がいなくなったがダンベという言葉は残っていた。“所変われば言葉が変わる”である。県内では久喜八雲神社のちょうちん山車行事や秩父神社の川瀬祭りが有名。天王様の祭は京都の八坂神社の祇園祭から伝播したと一般には思われているが愛知県津島神社が関東から岩手県まで、この祭りを主導した形跡がある。それは津島神社の御師が数名単位で行動し、流行らせたからである。埼玉は津島系である。江戸時代は所沢からもお伊勢参りに行く人もいたが、帰りには津島神社に必ず立ち寄ったといわれる。津島神社は素晴らしい建物の神社で必見の価値があり、是非一度行ってくださいと推奨された。

②埼玉の七夕と青森の七夕

七夕は中国伝来のもので元々は貴族社会のお祭り、五節供の一つ ^{きっこうばく} 乞巧莫であり、技芸の上達を願うものである。女性は裁縫、男性は書の上達である。それぞれ笹竹や短冊に願いを込めたものである。

埼玉の七夕は所によって違いがある。低地の習俗と山間地域の習俗の違いを写真で説明していただいた。七夕は水神信仰が根底にあり、七夕では7回食べて7回泳いだという。これは青森の資料館でも同様な習俗を確認していると説明された。秩父地方では合歡の木を使った眠り流しを行ってきた。青森や五所川原の倭武多も眠り流しが発展したものである。秋田のかんとうも七夕の行事（かんとうの頂上に七夕の表示有）であり、眠り流しから始まり都市の祭りとして発展したものである。民俗文化は結構、伝播していることを感じているとのこと。七夕の所沢の御馳走はゆで饅頭とうどんであった。これも所沢が麦作地帯であったことを反映している。七夕行事はぜひやって欲しいと。外国人が日本に魅力を感じるのはこうした民俗文化行事である。これが廃れると日本の観光も衰退するであろうという。

③盆行事（盆とはサンスクリット語）

盆行事はもともと、養蚕の関係で所沢では7月中旬に行われてきた。昔は7月1日から1か月行われた。地獄の窯の蓋が空くのが7月1日という。祖霊の迎え方は所により様々で墓とは限らない、山からも海からも川からもあるし、家では玄関でなく縁側から入るのがしきたり。また、樹木には神様が宿る（依代＝よりしろ）信仰がある。

④悪霊はくさい臭いを嫌う。（臭いで撃退する習俗） 略（テキスト資料など参照）

⑥悪霊を村に入れない習俗（村境の習俗）

資料を簡単に記すと ・ムラ境で獅子舞を舞う ・道きり（道路に注連縄を張る）
・縄で作ったでかい蛇をつるす（稲作地帯） ・穴の開いた大草鞋をつるす（こんな大男が監視しているぞという意）・サイコロをつるす。多くの目が見張っている（サイは領地をも示す） 以上のようなユニークなさまざまな手で悪霊払いをした。



⑥正月

もちなし正月という習俗の地域がある。かわりにうどん正月とした。もちを忌避する地域である。餅を食べるとおできができる、火事になるということが理由とされた。こうしたところは稲作に不向きな地域がそれにあたるという。

お正月とは恵方からやってくる歳神様の祭りである。ただ御馳走を飲食するものではないことを子供や学生にはしっかり伝えるべき、習俗を知らない外国人に恥ずかしい。お年玉は歳神の力を与える。（子供に力、魂を与えることである）

小正月は元々の正月で農業との関係が強い正月である。（太陰暦では15日が月初め）所沢では繭玉飾りや餅花飾りを行って養蚕の繁盛を占った。飾りは樫の木またはコナラの木に飾るが根元にはかいこの16個の足に見立てただんごをあしらった。もう一つ所沢で昭和42年に偶然見かけ写真におさめた「成木責め」という習俗が広く、一般的に行われていたようだ。これは柿木など木の霊を棒と攻めの文言を唱え屈服させて、実がたわわに稔るように願ったものであった。食べ物も田圃に見立てた小豆をかき回し粥仕立てで食べた。食べ方も特別な縁起担ぎのルールがあった。田の神様はすべて“さ”という

言葉で始まる。サナブリ（田植えを終えた祝いのごちそう）、早乙女、などである。

⑦お産の場所は？ 略

先生の話は不思議・面白く尽きない。2時間でも話し切れずかなり端折ったとのことであつたが、12時に終了した。先生のお話しの全てを記述することはむりで、間違つた解釈をしているかもしれない。興味のある方は著書である「民俗の原風景」や「所沢市史別巻民俗」が参考になるが、先生のお話を生でお聞きする方が100倍楽しい。

なお、新聞によると令和元年の天王様の祭り、久喜の「久喜提燈祭り『天王様』」は7月12日、秩父の「秩父川瀬祭」の「御神輿洗い」の神事は7月20日に行われた。

（追記）

さいたま民俗文化研究所で取り扱いの近刊 を紹介します。

『狭山湖―水底の村からの発信』 宮本八恵子 著

A5判 240ページ カラー（写真・図版400枚）定価2300円（送料込）



北野天神・令和元年7月14日
八雲神社の天王様祭り



写真撮影 小川雅愛